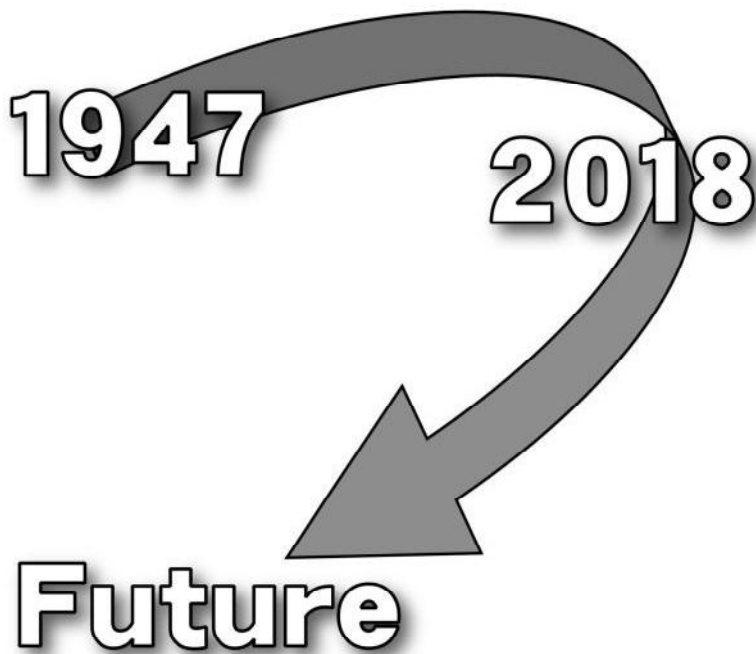


協力伝道会議

事前配付資料

(第二版)



日本バプテスト連盟

宣 教 部

協力伝道会議 事前配付資料 目 次

協力伝道会議とパラダイムシフト	1
日本バプテスト連盟結成の経緯	2
S B Cの支援と教会の拡大	3
成長・自立のものさし	4
歴史性と隣人性への気づき	5
教会学校	6
礼拝・賛美歌	7
超高齢社会を生きる教会	8
〔資料① 人口動態〕	9
青少年が生きる教会	10
国際交流・国際協力・国外伝道	11
協力伝道の形	12
新来者や求道者をどう迎えるか	13
各個教会主義を考える	14
バプテストの信徒・牧師	15
伝道者養成	16
固定した性役割からの解放	17
基金・資金時代	18
協力伝道献金体制の意味するもの	19
連盟の財政	20
〔資料② 教勢の推移〕	22
【協力伝道会議予定表】	24

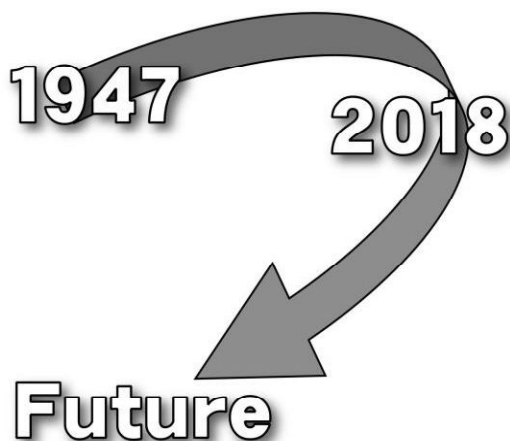
協力伝道会議とパラダイムシフト

今年度、日本バプテスト連盟結成70年の取り組みの1つとして、全国で《協力伝道会議》を実施していきます。今という時代を確認し合い、これからの連盟における協力伝道の働き、あり方について共に考える会議です。これまで、しばしば連盟の役職をもった人たちによって開催されてきた「宣教会議」とは違い、この《協力伝道会議》は、諸教会の皆さんが中心となって開催されるものです。

「協力伝道会議」のキーワードとなっているのは、《パラダイムシフト》という言葉です。パラダイムとは、「ある時代に支配的なものの考え方・認識の枠組み。規範」とされています。《パラダイムシフト》とは、そうした考え方や枠組み、規範といったものの変化を指す言葉です。

教会は、時代の変化、人々の生活環境の変化、社会情勢の変化と決して無関係ではありません。私たちが直面しているこんにちの困難は、これまで教会が持ってきた常識や前提が通用しなくなったことの表れなのかもしれません。だとすれば、これまで当たり前だと思ってきたことや、当然のように目指してきた目標を問い直し、視点を変えて見直していくべきではないでしょうか。常識や前提、そして物事を見ていく視点が変わること、事柄を捉える基準としての「ものさし」が変わることになり、これまで「問題だ」「課題だ」と受け止めていたことが、むしろ豊かな可能性を含んだ出来事として受けとめ直されていくこともあり得ると思います。

《協力伝道会議》では、こうしたパラダイムシフトを目指して、課題と可能性を共に考えていきたいと思えます。そしてすでに、様々な出会いの中からパラダイムシフトが起こされている教会もあります。そうしたアイデアや取り組みから、これからの教会の姿や宣教の在り方、そして連盟の協力伝道の形について、一緒に分かち合っていきたいと思えます。



日本バプテスト連盟結成の経緯

戦時中は国策に応じて日本基督教団に属していた旧西部バプテスト組合系教会は、敗戦を機に再び協力伝道団体を結成しました。敗戦の年の1945年11月、既に日本宣教の戦後政策を考えていた米国南部バプテスト連盟外国伝道局総主事ランキンから、東京の小石川^{かごまち}駕籠町教会（現目白ヶ丘^{ゆや}教会）の熊野清樹のもとに、交わりを求める書簡が届きました。また翌年、旧西部バプテスト組合系の牧師たちは会合を持ち、日本基督教団離脱を模索し始めました。そして、1946年11月、E.B.ドージャーが外国伝道局特使として来日し、福岡で旧西部バプテスト組合指導者たちと会合を開き、外国伝道局の日本伝道再開への協力を要請しました。これに意を強くした日本の指導者たちは、南部バプテストの下に新しい団体を結成するために、翌1947年4月2日、福岡の西南学院教会に集まって協議をし、翌3日の新団体設立総会において、旧西部組合16教会による「日本バプテスト連盟」を結成しました。

総会では、規約第3条「教義の大要」として提案されたいわゆる「1947年信仰宣言」が審議されました。これは、1943年に創立したハワイ・バプテスト連盟の信仰宣言を翻訳したものでした。福岡に集まった16教会のうち、日本基督教団離脱の



申請を済ませた教会は2教会のみで、あとはすべて連盟結成後に提出しています。離脱理由として、教会観や礼典理解の違い、そして米国南部バプテスト連盟との協力を挙げていますが、中には「米国南部バプテスト外国伝道局が日本基督教団所属教会に対しては援助を与えざるため」とあります。事実、連盟結成後の伝道の目覚ましい数的増加の背景には、外国伝道局からの莫大な献金と多くの宣教師派遣があったことは否めません。その一方で、自分たちの言葉による信仰告白作成や過去に対する真剣な悔い改めは遅れ、1979年の「信仰宣言」、1987年「連盟結成四〇周年に当たって」、1988年「戦争責任に関する信仰宣言」で、ようやく自らの言葉で表明されるようになります。

●考えてみよう●

- ・連盟結成当時の動機はどのようなものだったのでしょうか。
- ・戦中の教団統合と、戦後の教団離脱をどのように振り返るべきでしょうか。

SBCの支援と教会の拡大

1947年に16の教会によって結成された「日本バプテスト連盟」は、米国南部バプテスト連盟（SBC）の多額の伝道資金援助を得て、加速度的に加盟教会数を増やしていきました。結成から22年後の1969年には、教会数141、伝道所数107（計248教会・伝道所）となりましたから、驚異的な増加です。

「全日本にキリストの光を」 — 1000の教会・10万の信徒 — というビジョンを掲げ、第一次・第二次「躍進五ヶ年計画」のもと、各都道府県の比較的一等地に土地・会堂を備えた教会を建て、伝道者を派遣し（5年間の給与保障）、「布陣」「布石」を敷いていきました。当時のSBCからの支援金がどれほど大きいものであったかを憶えるため「新生運動」（1963）が含まれる「第一次躍進五ヶ年計画」の時代の支援金額を見てみましょう。

	SBC補助金	協力伝道献金	
1960	182,435,515	7,042,648	第一次躍進五ヶ年計画
1961	161,576,596	8,278,361	
1962	135,916,801	8,789,759	
1963	181,975,078	10,632,924	新生運動 テキサスより＋1億円の指定献金
1964	213,178,076	11,626,386	
1965	222,139,554	12,437,319	
1966	211,923,795	13,759,646	第二次躍進五ヶ年計画
1967	247,081,804	16,020,795	第2回テキサス伝道

これを見ると、連盟諸教会・伝道所からの献金の、15倍から25倍の補助金を受けて伝道推進が行われていたことがわかります。1947年から1976年（連盟自給化）までのSBCからの補助金合計は、37億5千万円（当時）ですから、こんにちの額に置き換えてみれば、どれほど巨額の伝道資金だったかと驚かされます。感謝と恵みの事実です。

●考えてみよう●

- ・ 結成70年を形成してきた私たちの「体質の何か」が、こうした潤沢な伝道資金時代に培われたものであるとするならば、こんにち、わたしたちはこの「恵みの時代」をどのように振り返るべきでしょうか。

成長・自立のものさし

日本バプテスト連盟では、伝道所が教会組織をする指標として教会員数と年間の献金額（30名と500万円）が重視されてきました。その一方、連盟結成初期に教会組織をした教会の「信仰告白」に、連盟の「信仰宣言」をそのまま用いていたものが少なからず見受けられます。これは当時の「自立」のものさしが、教会規模や経済力に重きが置かれ、自らの言葉による「信仰告白」が重要視されていなかったことのあらわれだといえるでしょう。

現在では、自らの「信仰告白」の言葉を持つことの大切さが理解され、連盟の「信仰宣言」をそのまま用いていた教会が、改めて自らの言葉で「信仰告白」を作り上げるといったことも起きています。これは、「自立」のものさしの変化の一例といえるでしょう。

また、相互に支えあう「相互支援」の大切さを受けとめることも、新しい自立のものさしといえるでしょう。ところで、この相互支援を大切にしようとするときに、支援を受けることへの抵抗感が壁となることがあります。各個教会のミニストリーを尊重し、上下関係とならないような配慮を持つことができるならば、相互支援の中で起こる出会いを通して、各個教会主義をより豊かなものにしていけるのではないのでしょうか。

同様に「成長」ということも教会員数や礼拝出席数、経済力といったものさしだけでなく、より広く多様な面からも捉えられることが大切です。連盟の教会学校の目的には「生の全領域」という言葉が記されています。私たちはこの言葉を通して、教会と社会、聖と俗、といった二元論的な信仰生活を克服していこうという思いを表しました。そして、特別委員会を設置するなど社会の出来事を自らの宣教課題として受け止める努力をしてきました。このような歩みの中で、私たちは「成長」をとらえるものさしとして、数字に表れる事柄だけではない重要な視点があることを学んできたのです。

●考えてみよう●

- ・ 私たちにとって「自立」「成長」とは何を目指すことなのでしょうか。
- ・ 危機的、困窮状態にある教会を支える「共助」はどうあるべきでしょうか。

歴史性と隣人性への気づき

1960年代、SBCからの自立・自給が諸教会の中でテーマとなります。時を同じくして、「福音理解」も個人的な内面性を重視したものから、歴史や隣人に関心が向けられるようになります。その背景には、日米安保問題やベトナム戦争がありました。教会は歴史の中に置かれ、社会の中に立てられているということが強く意識されるようになっていきました。

国会では、戦前・戦中の天皇制を精神的に支えていった「^{きげんせつ}紀元節」の祝日化、また靖国神社を国家の管理のもとに置こうとする「靖国神社国家護持法」が審議され、連盟を含むキリスト教界や宗教界で反対運動が展開されました。そうした中で1967年、連盟の中に「靖国神社問題対策委員会」（のちの「靖国神社問題特別委員会」）が設置され、社会的・歴史的問題を宣教課題として受け止め、取り組む機関が連盟内に設けられました。その後、こうした特別委員会は、「韓国問題特別委員会」（現／日韓・在日連帯特別委員会）、「公害問題特別委員会」「部落問題特別委員会」「ホームレス支援特別委員会」「性差別問題特別委員会」など、その取り組みが広がっていきました。こうした歴史や隣人への関心の深まりは、新しい連盟の「信仰宣言」（1979年）や「戦争責任に関する信仰的宣言」（1988年）にもつながっていきます。

20世紀終盤、それまで世界を支配していた東西冷戦構造が終わりを迎えますが、世界各地で紛争や内戦などが勃発するようになります。21世紀に入ると、アメリカで起きたテロ事件をきっかけに、報復の連鎖、暴力の連鎖が世界に広がっていきます。そのような時代にあって、聖書に記されている正義と平和について、私たち自身の信仰的立場を明確にしようと、2002年に「平和に関する信仰的宣言」が採択されました。

こうした歴史との向き合い、隣人とそのいのちへの向き合いは、宣教部の働き、特に国外伝道などに大きく影響を与えています。

●考えてみよう●

- ・教会は歴史と無関係ではありません。今という時代の中で教会はどう立っていくことができるでしょうか。
- ・私たちは「隣人を愛する」という招きをどう受け止め、誰と共に生きることを目指しているのでしょうか。

教会学校

連盟は1947年結成後すぐ”に信徒による全年齢層教会学校運動に取り組みました。それまで子どもの宗教的情操教育とされていた日曜学校を改め、教会の本質的働きとして全年齢層に展開する教会学校を目指すものでした。それは、教会の教育的・伝道的・牧会的使命を担う全教會的信徒運動であるとする米国南部バプテスト連盟の日曜学校運動に学んだものでした。

1953年には日本で初めての教会学校成人科テキスト『聖書教育』を季刊で発行しました。その後『聖書教育』は教案誌あるいはテキストとして全年齢層教会学校運動を担う重要なツールとしてその役割を果たしてきました。



学びの内容としては、聖書が私たちの生活と切り離せない関連性を持つゆえに、キリストを主と信じ、同時にキリストに従う者となることを目指すものです。この理念は、教会の宣教の内実が激しく問われた時期の議論を背景に1971年に制定した「教会学校の目的」に表わされました。「教会学校の目的は、その活動を通して、すべての人がイエス・キリストを信じる信仰告白に導かれ（教会を形づくり）、生の全領域において（主に聞き、）主を証しする生活を確立していくことにある」（*括弧は1999年に加筆）。

教会学校活動の担い手は信徒です。バプテストは、専門家に頼らない信徒の自主的で自由な聖書の読みと解釈を尊重します。しかも個人にも頼らず、共同で聖書から聴く中に神のメッセージを見い出そうとします。学びの方法は、知識を一方的に提供する《教授法》ではなく、参加者の対話による《共同学習》を目指します。しかも、聖書の学びだけではなく、伝道と相互牧会もまたクラスの重要な活動です。このようにして対話力を身に着け、聖書に主体的に取り組む信徒によってバプテスト教会を形成することが教会学校活動には期待されています。それは同時に日本バプテスト連盟の協力伝道を推進する大きな力ともなっています。

●考えてみよう●

- ・教会学校が、「共同学習」の豊かな時間となり得ているでしょうか。
- ・互いに聴き合う対話力は養われているでしょうか。

礼拝・賛美歌

礼拝はその宗教の特徴や主張をあらわす行為と言われています。キリスト教においても教派による特徴が礼拝に現れています。例えば、カトリック教会のミサでは^{せいたいはいりょう}聖体拝領（聖餐式）といういわゆる礼典（儀式）をプログラムのクライマックスとしています。一方、多くのプロテスタント教会は説教（宣教）によって語られる「神の言葉」を礼拝の中心に置いています。

それでは、私たちの教会ではどのようなことを大切にして礼拝プログラムが構成されているのでしょうか。各個教会主義のバプテストの礼拝プログラムは教会によって異なります。落ち着いた雰囲気大切に礼拝もあれば、活気や明るさを大切にするところもあるでしょう。そして、会衆主義の教会においては、どのようなスタイルの礼拝が正しいかということ以上に、礼拝を形成する会衆が礼拝プログラムに込められている意識や主張を理解し、共有することが重要です。

教会音楽については、多くのプロテスタント教会は会衆賛美歌を重視しました。それまでのカトリック教会では、賛美歌や音楽は専門家によって奏でられ、その言葉は会衆に理解できないラテン語でした。言葉よりも神聖な雰囲気を作ることに音楽は奉仕していました。それに対し、ルターは自国語（母語）による賛美歌を会衆が歌うことを重視しました。

ところで、言葉を大切にする礼拝という時に、賛美歌の言葉はどのようなものがふさわしいのでしょうか。ある教会では若者にもわかりやすい言葉を使った賛美歌を礼拝で用いたところ、長く慣れ親しんできた言葉が変わったことで「年寄りじめだ」という声が上がりました。礼拝で皆が賛美の言葉を理解し、思いを一つにしようとしたのですが、賛美歌を通して世代のギャップが浮き彫りになってしまったということが起こりました。また、プロテスタント教会では母語による礼拝を大切にしてきましたが、多様な母語を持つ人たちが礼拝に集まるようになってきていることも、これからの礼拝のテーマとなっていくでしょう。

●考えてみよう●

- ・ 礼拝の流れやプログラム内容の位置づけが共有されていますか？
- ・ 様々なルーツを持った人たちと一緒に礼拝への工夫がなされていますか？

超高齢社会を生きる教会

国連やWHOの定義によれば、65歳以上の人が人口の7%を越えた社会は「高齢化社会」、14%を越えると「高齢社会」、21%を越えると「超高齢社会」と呼ばれますが、日本の65歳以上の人口比率は、昨年9月に26.7%となり、国内の80歳以上の高齢者の人口が一千万人を越えたそうです。

超高齢社会が日本社会の現実である以上、教会もまた「高齢社会」になることは必然のことです。特に、新生運動などが盛んにおこなわれた時代に教会に出会い、青年時代にそれぞれの教会の「開拓期」や「躍進時代」を担ってきた教会メンバーたちの多くも、この団塊の世代と重なりますので、社会の人口動態はそのまま教会の人口動態と重なるのです。

諸教会・伝道所からは、「少子高齢化」を嘆く声がよく聞こえてきます。けれども、福音を響かせる教会にとって、教会が高齢社会であることは、ちっとも悲観するものではありません。「戦後」日本社会を、主イエス・キリストと結ばれる喜びをもって生きてきた方々の「人生の証し」が蓄えられているという素晴らしい事実が教会にはあります。それら教会の「高齢者」たちが、今こそ、その人生を振り返って主を証しし、復活の希望の中で人生を再解釈することのできる喜びをわかちあい、同時代を生きる「高齢者」にも、少し年下の年齢層の人々にも、さらには、これからを生きる若者たちにも「イエス様と出会った人生はステキですよ」と証言していくことができるとするならば、それこそまさに福音伝道の「好機」と言えるのではないのでしょうか。

他方、こんにちの若者たちがおかれている現実、なかなか厳しいものがあります。産業構造が空洞化し、地場産業や商店が駆逐され、若者たちは低賃金や非正規雇用、「ブラック企業」と呼ばれる劣悪な就労環境に喘いでいます。シフトで働く人が多いですから、日曜の朝にはなかなか教会に来られない。そうした若者世代の現実に目を向けるなら、以前語っていたように「若者が増えれば教会は活発になり『経済も回復する』」というイメージは修正されなければならないことに気づきます。

日本社会そのものが抱えるジレンマに巻き込まれながらも、そこでこそ、世代を超えて人が集まる「居場所」をつくるにはどうしたら良いか。近隣教会と一緒に考えていきたいテーマです。

【資料① 人口動態】

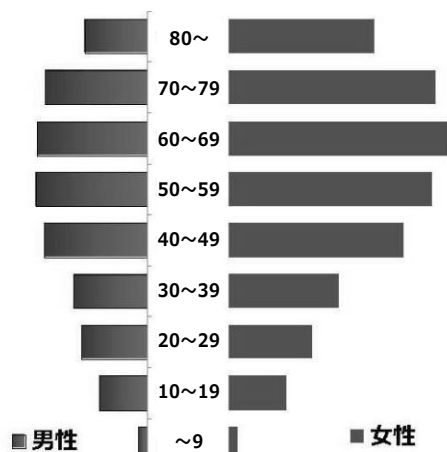
ここに記しているグラフは、教勢報告（2016年）をもとにした連盟諸教会の現在会員数を年齢別に示したグラフです。60歳代がピークの山になっていることがわかります。これが、いわゆる「団塊の世代」です。

一方、下のグラフは厚労省が発表している人口ピラミッド（2010年）と2040年の予想値です。2010年という少し古いデータですから、実際には1メモリずつ繰り上げる必要があります。けれども、だいたい60歳代

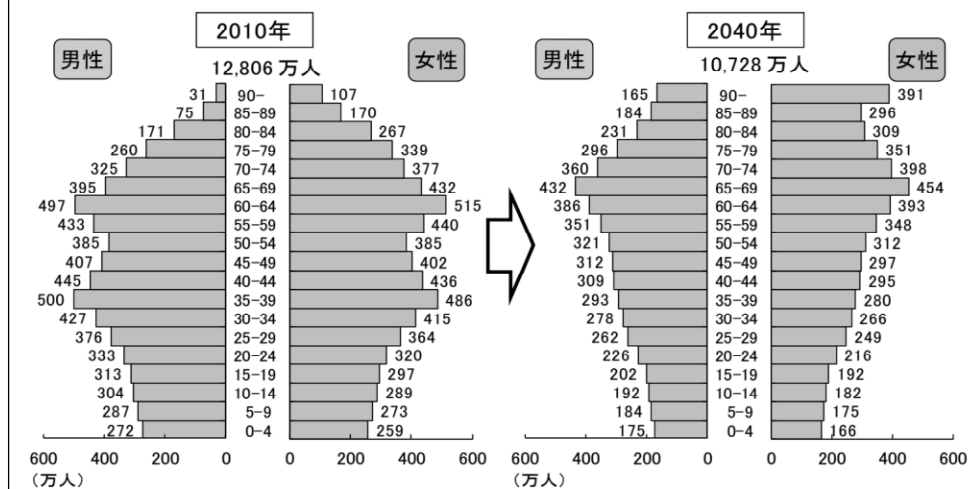
がピークになっている点では、連盟の会員と同じです。しかし、2010年のグラフで、35-39（現在の40-44）歳代に、もう一山あることが分かります。これは連盟の会員には見られない山です。

一方、国が想定している2040年の人口ピラミッドを見てみると、連盟の現状は、むしろそちらに近い形になっていることが分かります。こうした実情をどのように受け止めていったらいいのでしょうか。また、これからの教会は、どうあることが求められているのでしょうか。

【日本バプテスト連盟年齢別教会員数】



人口ピラミッドの推移(2010年および2040年)



【厚生労働省 都道府県別将来推計人口より】

青少年が生きる教会

青少年が生きる教会。それは、単に「どうすれば、教会に青少年が増えるだろうか」という問いとは本質的に異なるテーマです。そもそも、教会の将来のために…、教会の活力のために…、教会の後継者として青少年を語ったり、ターゲット設定をすることはあまり感心できません。「〇〇のために」と目的を設定された場所に、誰も入っていきたいとは思わないからです。『大人たち』がつくってきて、できあがった教会を、大切に継承する後継者を育てなければ」と躍起^{やっき}になればなるほど、彼ら・彼女らはそこに近づかなくなってしまうでしょう。

それに、「青少年」という名前の人はいないのです。大切な視点は、そこにいる思春期、青少年期を生きている「その人」をその人として受けとめ、真剣に向かい合い、一緒に聖書に格闘していくことだと思うのです。「大人たち」「先輩たち」が、社会の中に苦闘し、苦悩しながら、必死に聖書と向き合っている姿を、彼ら・彼女たちはしっかり見ていて、その姿の前になら、悩みを抱えた自分を開いてみたいと思うのではないのでしょうか。

少年少女期、青年期という時代は、とても短いのです。短いのですが、その人にとってはとても意味深く、密度の濃い時代だと言えます。その時代のお会い、その時代の体験がその人の人生に大きな影響をもたらせます。そうした時代を生きる人たちだからこそ、その短い期間にできるだけ素敵な出会いをし、いのちについて、生きることそのものについて、社会の矛盾について、人間の罪について、そして神さまの真理や愛について考え、悩み、感じ、学んで欲しいと思います。教会が、そんな時代を生きる人たちに仕え、存分に「いのちを感じ、膨らませる作業」をすることができるような場となっていきたいものです。また、青少年期を生きている人たちにとって大切な要素は、「友だち」であり「伴走者^{ばんそうしゃ}」だと思います。「青少年が生きる場としての教会」を整えていく時の大切なポイントです。

協力伝道を考える上で忘れてはならないポイントに、若者たちを常に（都会などに）送り出す教会の祈りと、それら若者たちを迎え入れていく教会の関わりと連携があげられます。地理・地域を越えた協力伝道、連携的な関わりという点も、これからいっそう重要になってきます。

国際交流・国際協力・国外伝道

私たちはかつて他国の「国外伝道」によって種が蒔かれ、育てられ、導かれて来ました。特にSBCから派遣された宣教師たちにどれほど支えられてきたことでしょう。国外伝道のスピリットを忘れず、私たちも国境を越えていく伝道（世界での伝道）に^{あずか}与り続けてゆきたいものです。

宣教の「パラダイムシフト」という点では、日本バプテスト連盟は過去に大きな転換をしました。それは、アジア諸国に宣教師を派遣する流れの中で気づかされたことです。経済的に豊かな国、持てる国から貧しい国へという上から目線の派遣ではなく、派遣相手国のニーズに応える宣教協力という姿勢に転換したことです。私たちがキリストの福音を持って行って伝えるのではなく、すでに先だって働いているキリストに、派遣国で出会っていくという宣教理解へと導かれたのです。

もう一つの気づきは、戦争責任、経済的収奪の責任を背負いながら、アジア諸国で共に平和の主に仕えるという姿勢です。アジア諸国に足を踏み入れるならば、たちまちに日本のかつての侵略戦争の傷跡があり、また今なお痛みを背負って生きている人々との出会があります。罪責を表明し、誠実に悔い改めをし、赦しを求めながら向かい合うことなしに、共に生き、共に歩んでいくことはできないことを知ったのです。また過去の記憶は、実は未来を築くための記憶なのだということを…。

さて、いま日本には世界195ヶ国より256万2千人の外国籍の人々が暮らしています。最も多いのは中国人で73万人、次いで韓国・朝鮮人が45万人、そしてベトナム人26万人、フィリピン人26万人、ブラジル人19万人…と続きます。来日し、日本で暮らす外国籍の人々の数は、これからどんどん増えていくでしょう。そのような時代に、教会は今後、国境・国籍を超えた「人々のプラットフォーム」としての役割を果たしていくことが求められていきます。象徴的な言い方をすれば「日本人の牧師が日本語で日本人の会衆に日本人のメンタリティーに根ざして説教を語る」という時代は劇的に変化していきます。どのように迎えるのか、という歓待の宣教とも言えるでしょう。

●考えてみよう●

- ・国際化の事実・現実、日本の教会はどのような備えをしていくべきでしょうか。

協力伝道の形

1947年に16の教会から始まった連盟の歴史は、今では300を超える教会・伝道所へと広がっていきました。米国南部バプテストの仲間たちから寄せられた祈りに基づく膨大な献金を背景に、日本の様々な地域に教会が立てられました。そして1970年代に「自給・自立」を目指した後も、伝道の勢いを失うことがないようにと、基金・資金によって拠点開拓伝道が展開されていきました。このように、連盟の「協力伝道」の柱は、新たな教会を立てていく、いわゆる“開拓”伝道でした。この“開拓”伝道路線については、その言葉や手法の中に問題や課題がなかったのか、問い直しを受けています。

2000年代に入り、新しい協力伝道の形がおこされます。「全国支援・地域協働プロジェクト」です。地域教会や近隣教会の連携を主軸として、地方連合の賛同を得た働き・活動を、全国支援として展開していくプロジェクトです。新潟主の港教会は3つの教会・伝道所が1つの教会として新たな歩みを始め、金沢教会と富山小泉町教会はフーシー両宣教師を招いて取り組んだ伝道活動を実施、そして8年間の協議を経て、連合内教会・伝道所の活性化と協力を目指した北九州宣教支援センターが起こされていきました。

この地域協働プロジェクトは、かつての「連盟主導」による協力伝道の在り方から、いわば「地域主導」型の協力伝道へと、その方向性を変化させる大きな転換でした。これまでの協力伝道の営みの中で様々な地域に起こされていった既存の教会が、共に協働しながら新たな取り組みを興^{おこ}していく。そしてそのことを全国の諸教会が祈り、支えていくという、これまでにない新しい協力伝道のイメージがもたらされました。

しかし一方で、その働きを継続することさえ困難になっている教会が多数あります。牧師や教会員の高齢化、あるいは教会財政の困窮のために長い期間牧師を迎えることが出来ない教会もあります。これまで、「自主・独立」の教会を目指してきた私たちは、こうした現状がある中で、さらに新たな協力伝道の形を模索していきたいと考えています。

●考えてみよう●

- ・ 諸教会の主体性と、連盟の協力を両立させていく「協力伝道」の可能性を広げるために、どのような工夫が必要でしょうか？

新来者や求道者をどう迎えるか

新来者が来ると嬉しいですね。でも、次の週に来て下さらなかったときは、ほんとうに落ち込みます。新来者や求道者の存在は、教会にとって、間違いなく「元気の源」です。

ところで、「パラダイムシフト」（発想の転換）という点で見つめ直してみたいことがあります。新来者が定着し始めますと、教会は「新来者クラス」とか「求道者クラス」という学びを意識し始めます。そして「基督教ABC」とか「教会生活入門」などを学んでもらいたいと考えます。でも、その前に……。そもそも、その新来者がある日突然、礼拝に来られたということは、とても奇跡的なことなのです。ですから、教会がまずしなければならないことは、「いったいあなたの中にどんな渇きがあったの」「あなたが生きるために何を求めようとしたの」とその方から聴かせていただく姿勢をもつことではないでしょうか。つまり、「教会が語るべき事」を知っているのは、教会ではなくその新来者なのだということです。

教会は、人間に大切なものを「教会が持っている」と考えやすいですが、そうではなく、教会が人間の人生やいのちについて語るべき事は、教会の外から飛び込んでくる、という事実気づくべきです。そして、その新来者といっしょに、教会が、聖書から聴き、一緒に学んで行く。このような「構え方」や「向かい合い方」のチェンジも、パラダイムシフトなのです。

家族の「救い」を祈ることも、私たちの基本的なテーマです。でも、その前に…。教会のメンバーには、家族の中で自分だけが教会に通っているという方もたくさんおられます。そのような方が、教会の執事をなさったり、各会活動や奉仕を懸命にしていることもよくある事です。だとすると、いまある教会活動、教会運営は、それらの方々の家族（未信者・非信者）の理解と寛容の中で成立していると考えることができます。教会は「救われた者」たちの集まりで、教会の使命は「未だ救われてない人々、特に家族の『救い』のために」と意気込む前に、教会は多くの人々の理解と許しの中で存在していることを自覚し、その上で、上から目線では無く、感謝と労いをこめながら、家族・友人がイエス様と出会って下さることを祈り続けていく姿勢が大切なのではないのでしょうか。

各個教会主義を考える

バプテスト教会の特徴の一つは「各個教会主義」です。一つひとつの教会こそが、教会としての主体であり、自己決定権を持っています。一つの自立・独立した教会の上には、その教会を支配する上部構造は無く、主イエスさま以外の権威を持つことは無いのです。

この原則を大切にすることで、個別の教会は、これからも主体的・意識的な教会として成熟していくことができますから、私たちバプテスト教会の「長所」だと言えます。けれども、各個教会主義だからと、もし教会が自分の殻に引きこもり、交わりを断ち、閉鎖的になってしまうのであれば、それはとても危険なことであり「短所」となってしまいます。

「各個教会主義」を語るときに、同時に（同じ意味を持つ概念として）考えなければならないことが「会衆主義」ということです。前述した、自己決定権とは、その教会の会衆が合議し、それによって教会が進んでいくということを意味しますから、教会の会衆主義が成立したり成熟したりしていないと、たちまち閉鎖空間の中で独裁主義がまかりとおっていくことになります。

初期バプテストが英国国教会から離れたとき、自分たちのグループの中にいわゆる「教職者」はいませんでした。メンバーたちが説教を担い、礼拝・集会を営みました。そしてそのような中から、説教や牧会に専念する専従者としての牧師を立てあげていったというのがバプテストの歴史です。と同時に、当時とかく「異端視」されたバプテストグループは、迫害的な社会風潮の中で、自らの信仰を証しし、互いに支え合うために早い時期から連合（アソシエーション）を形成していったということもまたバプテストの歴史です。

人が「個」としての尊厳を持ちながら、しかし独りで生きることはできないように、教会もまた近隣教会と協力し支え合って生きるところにこそ成長や成熟の鍵があるのではないのでしょうか。

日本バプテスト連盟という協力伝道体は、これまでずっと互いに協力しつつ、新たに協力し合う教会の誕生を願って協働してきたのですから、これからも、協力し合う各個教会主義を保っていきたいと思います。

●考えてみよう●

- ・各個教会主義を、教会内の会衆主義と、他教会との協力・協働という視点で見つめてみましょう。自らをひらき合う関係になっているでしょうか。

バプテストの信徒・牧師

バプテスト教会において牧師は身分ではなく職分である、とよく言われます。まさにその通りです。牧師は、教会員とは別の「教職者集団」に所属し、そこから遣わされて教会を監督、教育するという位置関係にではなく、教会（会衆）に立てられ、神さまから教会に託されたミニストリーを委託されていきます。説教も牧会も礼典執行も、教会のミニストリーです。

ところが連盟結成からしばらくは、あるいは各教会の開拓伝道期からしばらくは必ずしもそうではなく、連盟政策によって一つの地域に牧師が派遣され、「開拓」伝道者として「掘り起こし」「種を蒔き」「育てていく」という行程を担いました。またしばらくは、蒸気機関車の機関車両のように先頭を走り、客室車両を引っ張っていくような、ある意味ワンマンな力を発揮しました。初代牧師とはおおむねそのような働きをなさったのです。

しかし教会も年月を重ねて来ますと、いつまでもそうであってはならないことを学んでいきます。「信徒の教会」としてのバプテスト教会を整えるために、教会員が自ら考え、互いに組み合い、教会の合議をもって前に進んでいく術を身につけねばなりません。この時点で、リーダーシップ像のイメージチェンジが必要になるわけです。こうした時代に必要になってくるのが、コーディネーターとしてのリーダーシップです。

また、日本社会も戦後70年を経、社会の体制の疲弊や疲労、矛盾などが表面化して来ますと、そこで生きる人々の人生の苦悩も多岐に及び、また複雑になってきます。家族像や夫婦像、生き方、働き方、学び方なども多様になってきました。そのような、多様な人生が交差する交差点としての、また多様な人々が共生する共同体としての有り様を包摂^{ほうせつ}していくためには、それらを言葉化したり、その課題に寄り添う「寄り添い方」を引き出すファシリテーター（調整的な促進者）としてのリーダーシップも求められてきます。そして、それはもはや牧師がただ独りで修得しなければならないリーダーシップではなく、牧師と教会員とがチームとなって発揮しなければならないものなのかもしれません。

●考えてみよう●

- ・こんにち、教会の牧師が果たしていくリーダーシップはどのようなものが期待され、求められているのでしょうか。

伝道者養成

協力伝道の大切な使命の1つは、伝道者養成です。これは、連盟結成以来こんにちに至るまで変わらない使命です。現在、連盟には、西南学院神学部、東京バプテスト神学校、九州バプテスト神学校の3つの神学校があります。

学生寮を備え、全生活的に神学校で学ぶことのできる西南神学部は日本バプテスト連盟伝道者養成機関の中核です。しかし、様々な学びのニーズに応える東京バプテスト神学校、九州バプテスト神学校も伝道者養成にとって無くてはならない存在です。こうした連合立等神学校は、「多様な献身」に対応していく伝道者養成の場として位置づけられています。

ところで、日本社会の価値観の変化や、人口動態等の影響もあり、教会自身の構成要素も、教会を取り巻く地域の課題も大きく変わってきています。以前、当然のようにイメージしてきた牧師像や牧師の働きも変わってきています。多くの教会が財政的な課題に直面しており、教役者への人件費についてのジレンマを抱えており、かつて「このように待遇すべき」と学んだ理想からどんどん離れてしまう苦悩に直面しています。

「ひとつの教会に、一人の牧師を、フルタイムで・・・」という、かつての「常識・理想型」を保とうとすると、たちまち壁にぶつかってしまうのです。いまや、牧師が兼職することは普通のことと捉えるべきかもしれませんし、バプテストならではの「兼任制度」、つまり複数の教会が支援関係を結んで一人の牧師（教役者）を派遣したり迎えたりという方式もあっていいでしょう。それらも、いわゆるパラダイムシフト（これまでの考え方や枠組みの転換）の一つだと言えます。

すると、こんにちの伝道者に求められている修得課題はどういうことになるのか。教会現場の現実課題と神学校のカリキュラムは噛み合っているか。お互いの学校の形態の違いを互いに生かし合うにはどうしたらよいか。それらを検討する見地も自ずと変わってくるはずです。

●考えてみよう●

- ・フルタイムの牧師を招聘出来ない教会が増えている中で、これからの時代に即した伝道者のスキル(技能)は何が求められるのでしょうか。
- ・3つの神学校がそれぞれの特徴や特色を活かし合う伝道者養成に、どのような可能性があるのでしょうか。

固定した性役割からの解放

これからの教会の姿を模索する際、教会の中に横たわっている「性役割の固定」を打ち破っていくことも大切な作業です。牧師という働きも、「性役割という枠（パラダイム）」から自由になれなかった職務だと思えます。

牧師の招聘を考える時に、「男性」の「妻帯者」の牧師を前提にしたイメージを持っていることはありませんか？

「私たちの教会には子どもがいないから、お子さんのいる牧師がいい」

「教会に奏楽者がいないので、奏楽のできる『奥様』がいるといい」

牧師招聘の相談で実際に聞かれるこうした言葉は、その教会の欲求の現実の中から出てきた言葉だと思いますが、牧師は既婚者であるという前提、男性であることが前提にあります。また「牧師夫人」の役割が既にイメージされています。もっとも深刻なことは、「教会の困窮点や課題を、やがて着任する牧師と牧師に伴ってくる要因によって克服しよう」としている点です。

こうした声に出会う度、その都度、「その前提を変えてみませんか」とお伝えし対話をいたします。するとその時、初めて自分たちが固定観念を持っていたことに気づき、そのことも含めて再考してくださる教会もあります。つまり、とてもシンプルな事実をシンプルに捉えられなくしている永年の通念が、私たちの教会を空気のように包んでいるということかもしれません。

こんにち、牧師たちは多様な姿で生きています。単身の男性の牧師、単身の女性の牧師、夫婦が共に牧師、夫婦がそれぞれ別の教会の牧師、女性の牧師の配偶者が信徒、牧師の配偶者がノンクリスチャン、など様々です。また国籍等の背景も多様です。数十年前に「牧師」をイメージしたときの牧師像（牧師家族像）にはあてはまらないたくさんの牧師たちが豊かに存在しています。それらの生き方や立ち方を受けとめ、尊重し、「その牧師」の姿を教会全体で喜び活かしていくように歩みたいものです。

過去に牧師を志しながら、さまざまな壁に道を閉ざされたり、無理解の中で苦悩し、また苦闘を余儀なくされてきた女性の献身者（女性の牧師）の現実を直視し、またそのような差別的な実情をながらく放置した歴史を反省して、女性の牧師の招聘や赴任を促進することが連盟諸教会・伝道所の大切な課題であることを、理事会や宣教部は認識しています。

基金・資金時代

1991年～2000年は「500の教会、5万の信徒」をテーマにかかげた10年でした。1960年代末にはおよそ250の教会・伝道所、20,500人の信徒数となった日本バプテスト連盟でしたが、70年代に決議した「自給化路線」によって、各教会が内向きになってしまわないようにと、更なる協力伝道のスピリットを確認したのがこの「500と5万」のスローガンでした。福音宣教のビジョンを数字・数値で表すことへの異論もあり、宣教の中味や自立と協力の内実をこそ大切にすべきとの問題提起と共に歩んだ時代でした。

1990年前後、新宿の連盟事務所土地売却に伴い（売却額約96億円）、基金・資金を設定して伝道するプランが採用されました。基金・資金は、教役者退職金制度の立て直し、南浦和の新しい事務所建築の他、1991年以降の中長期活動計画で積極的に用いられていきます。新たな全国拠点開拓伝道（Aタイプ支援・10箇所）、不動産を持たない教会・伝道所に対する不動産取得支援（Bタイプ支援・30箇所）が実施されました。また国内宣教師制度を設けて「教会復興」にも取り組みました。教会活動の活性化や信徒訓練のために、各種研修会やバプテスト大会が実施され、『聖書教育』『新生讃美歌』をはじめ、各種テキストが発行されていきました。さらに宣教論・教会論の研究を深め、牧師の継続研修に仕えていくために、宣教研究所も設立されました。

しかし、この基金設定に基づく伝道プランは、その利息によって長期の運営を予定していましたが、バブル崩壊、住専問題、リーマンショックなど経済悪化・停滞に伴う金利低下により、結局、プラン実施のために元本を資金化して取崩し続け、今後の事務所建物等の維持管理のために必要な準備金を残して、すべての基金・資金が無くなりました。それゆえ、一般会計の赤字を補填してきた原資も無くなりました。

現在は、「協力伝道献金体制」と呼ばれるように、諸教会・伝道所から毎年献げられる協力伝道献金の範囲で活動をしなければならないのですが、基金・資金時代に展開した諸プログラムのほとんどを現在も継続しています。

●考えてみよう●

- ・自給化路線とはなんだったのでしょうか。
- ・協力伝道献金体制のもとで、連盟の働きはどうあるべきなのでしょうか。

協力伝道献金体制の意味するもの

前述の通り、1970年代に決議された「自給・自立」路線は、新宿（当時）の連盟事務所の土地売却により、当初の予想を超える多額の売却益が与えられたことで、協力伝道献金体制が一時棚上げされた形になりました。そして、バブルの崩壊、金利の低下等によって基金・資金時代は終わり、2000年代に入って、「本格的」な協力伝道献金体制がスタートしました。

連盟結成70年を経た今、改めて南部バプテスト連盟からのサポートの時代、基金・資金体制の時代を振り返るとき、そこには共通する課題がありました。それは、経済的なつながりが協力伝道のつながりの中心となってしまったことであり、結果的にお金の流れによって協力伝道体である連盟の中に上から下といった力学を生じさせてしまっていたということです。しかし、協力伝道は経済的な協力以上に、異なった賜物を持った各個教会が互いにその賜物を生かして宣教の働きを担うことが重要です。ですから、協力伝道献金体制とは、教会と教会が上下関係ではなく、相互に横のつながりとしてネットワークを作る協力伝道体を形成していくことなのではないでしょうか。

また厳しい現実として、協力伝道献金体制は今中長期大綱において1億7千万円を見込んでいましたが、2017年度は1億4千万円弱でした。経済的な困難は事実です。一方、加盟諸教会の経常献金の中で、協力伝道献金の占める割合は、ここ10年ほどで高くなってきています。諸教会も財政的な困難を抱えている中で、協力伝道献金を献げているのです。

私たちは南部バプテストのサポートによって与えられた「恵み」、宣教活動を通して積み重ねてきた「恵み」があります。この「恵み」をそれぞれの教会、そして、協力伝道の中で、スチュワードシップの精神に立って管理し、用いていくことが求められています。

高度成長期の勢いやバブル時代の恩恵を懐かしむのではなく、時代状況を見つめ、それぞれの教会の取り組みやアイディアを持ち寄ること、そして近隣の教会や共通のテーマに取り組む中で、互いに祈り合う関係を大切にすることが協力伝道献金体制の目指すところなのです。

●考えてみよう●

- ・SBCからの多大なサポートを受けてきた私たちが、その恵みに応えるために、今できることはなんでしょうか。

連盟の財政

私たちは、毎年ごとの協力伝道活動を協力伝道献金だけでやっていく「協力伝道献金体制」で歩んでいます。けれども、前項で書かれているとおり、協力伝道献金の実情は厳しいものであり、献金額は年々漸減し、2017年度は約1億3500万円となっています。

この背景には諸教会・伝道所そのものが財政的な困難に直面している現実があります。322教会・伝道所の経常献金総額は、この10年間で5億6000万円少なくなっているからです。協力伝道献金体制ですから、献金の総額に見合った活動に縮小するか、必要な活動のために献金を満たしていくか、どちらの視点からも努力や検討が求められています。身の丈にあった活動を精一杯やっていく。そのためには、「連盟」の活動は何に重点を置くのか、連盟事務所の仕事として何を委託するのか。「連盟の財政」の現状を理解し、これからの財政を検討する上で、共有しておきたい大切なポイントです。

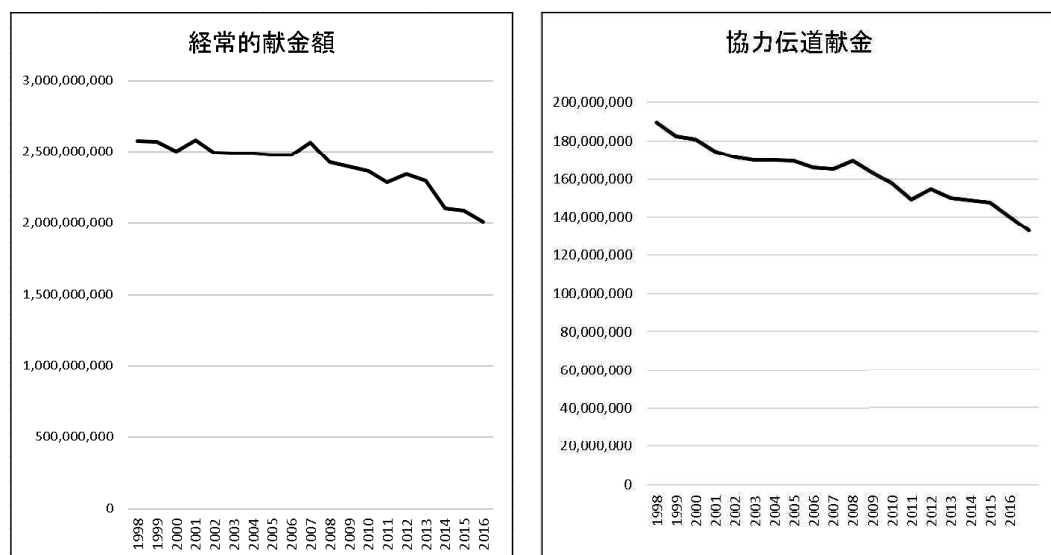
もう一つのポイントは連盟の「収益会計」についてです。連盟の財政は、実は「一般会計」だけで成立しているわけではなく「収益会計」と両輪のように動いています。ご存じの『聖書教育』や『バプテスト』誌や『新生讃美歌』は私たちにとって大切な刊行物であり、まさに伝道政策に直結していますが、価格（値段）がついているので、その売上げは収益となり、宗教法人の税務上の理由で別の会計として区分しています。当然ながら、これら刊行物を製作するためにも、また販売管理をするためにも常勤・非常勤にかかわらず多くの職員たちが関与し働いています。そのようなわけで、連盟職員たちの人件費は、一般会計が負担する部分と、それぞれの働きに応じて収益会計が負担する部分とが組み合わさって設計されているのです。

さて問題は、この「収益会計」が今のままでは10年後には破産してしまうのです。『バプテスト』誌や『聖書教育』などは、購読数が増えるか、もしくは価格（値段）を上げれば収支が合うのかもしれませんが、購読することがいっそう難しくなります。

現在、『バプテスト』誌と『聖書教育』の製作経費と販売収益をつきあわせると、毎年500万円～700万円のマイナスとなっています。かつては別の基金・資金を背景にこれらのマイナスを補填する仕組みになっていましたが、

現在はマイナスになれば預貯金残高を減らしていくしか方法がありません。収益会計全体の2017年度末の預貯金残高は6000万円。つまり8年～10年の内に行き詰まってしまいます。これを解決する方法は、新たな資金を投入するか、一冊の単価を値上げするか、一般会計から常に繰り入れ補填するか、マイナスを出さない努力をするか、です。

このように、日本バプテスト連盟の働き全体を、財務的に理解しつつ将来の運営を検討するためには、一般会計と収益会計の全体を俯瞰的に見つめることが大切です。



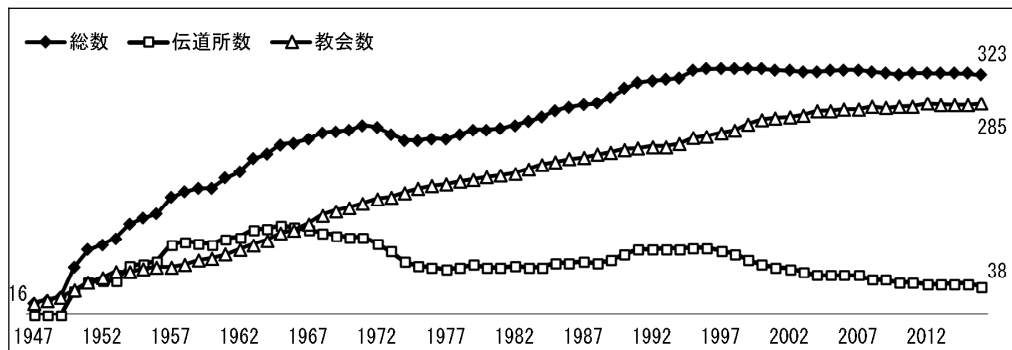
年度	経常的献金		協力伝道献金		対経常的 献金比率
	経常的献金額※1	前年度差額	協力伝道献金額※2	前年度差額	
1998	2,573,620,045		189,558,071		7.4%
1999	2,570,197,870	-3,422,175	182,579,308	-6,978,763	7.1%
2000	2,499,540,641	-70,657,229	181,047,721	-1,531,587	7.2%
2001	2,580,177,981	80,637,340	174,754,984	-6,292,737	6.8%
2002	2,488,971,349	-91,206,632	171,684,103	-3,070,881	6.9%
2003	2,484,753,683	-4,217,666	170,118,143	-1,565,960	6.8%
2004	2,487,116,226	2,362,543	169,917,627	-200,516	6.8%
2005	2,475,159,278	-11,956,948	169,630,452	-287,175	6.9%
2006	2,477,914,936	2,755,658	166,049,338	-3,581,114	6.7%
2007	2,565,018,107	87,103,171	165,522,776	-526,562	6.5%
2008	2,425,854,417	-139,163,690	169,675,132	4,152,356	7.0%
2009	2,391,651,005	-34,203,412	163,331,970	-6,343,162	6.8%
2010	2,361,432,494	-30,218,511	157,840,859	-5,491,111	6.7%
2011	2,283,373,732	-78,058,762	149,169,572	-8,671,287	6.5%
2012	2,339,067,203	55,693,471	155,007,591	5,838,019	6.6%
2013	2,293,197,931	-45,869,272	150,103,356	-4,904,235	6.5%
2014	2,100,087,881	-193,110,050	148,929,966	-1,173,390	7.1%
2015	2,086,353,343	-13,734,538	147,611,743	-1,318,223	7.1%
2016	2,006,623,506	-79,729,837	140,249,520	-7,362,223	7.0%
2017	1,995,538,652	-11,084,854	132,917,385	-7,332,135	6.7%

※1 2008年度以降は借家借室料を除いた額 ※2 教会・伝道所からの協力伝道献金額（個人献金は除く）

【資料② 教勢の推移】（2016年度教勢報告より）

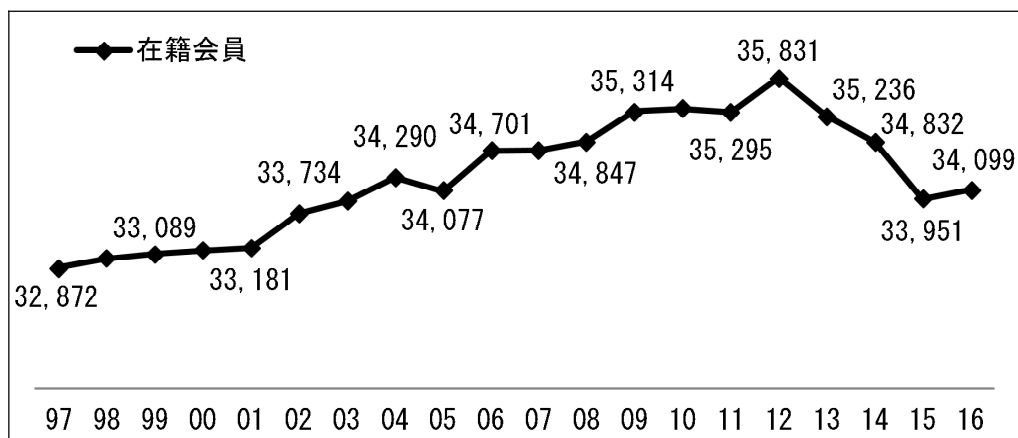
ここに掲載するものは、2017年度第63回定期総会報告書に掲載したグラフです。これらのグラフから、諸教会の実情をどう読み取っていくことが出来るのか、また、それぞれの個別教会の実情と重ね合わせながら、ご覧ください。

【日本バプテスト連盟教会数の推移】（1947-2016）



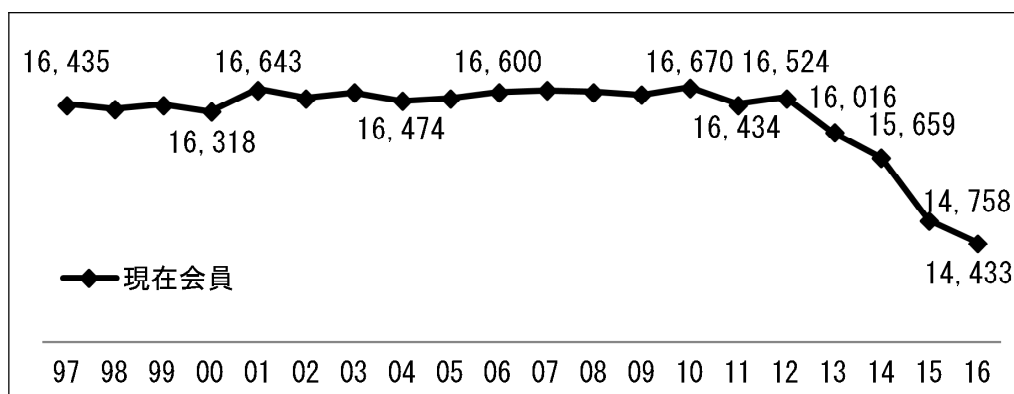
連盟結成以降の、教会と伝道所、及び教会・伝道所総数を表したグラフです。結成直後、SBCからの支援を受けていた1970年代前半まで、勢いよく増えていったことが分かります。一方、1990年代中盤からは、ほぼ横ばいになっていることが分かります。

【日本バプテスト連盟 諸教会の在籍会員数の推移】（1997-2016）



これは1997年以降の在籍会員数の推移です。グラフを見ると2012年をピークに減少しています。ただし、この在籍会員については、教会事務での原簿整理によって上下することもありますから、必ずしも正確なものとは言えませんが、減少傾向にあることは事実です。

【日本バプテスト連盟 諸教会の現在会員数の推移】(1997-2016)



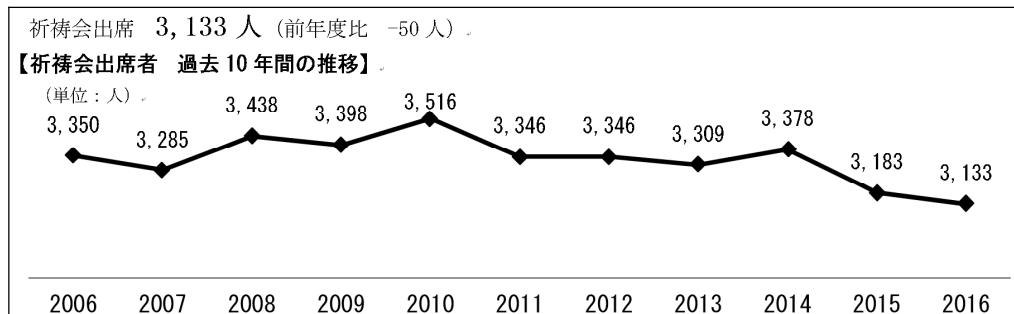
このグラフは1997年以降の在籍会員数の推移を表したものです。個別に大規模教会の連盟脱退なども要因として上げられますが、2012年以降、急速に減少していることがわかります。

【日本バプテスト連盟 諸教会の主日礼拝平均出席者数の推移】(2006-2016)

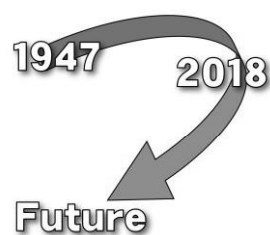


これは、過去10年間の主日礼拝出席者数の推移を表したグラフです。現在会員数の変化と同様、ここでも2012年を境に減少傾向が見られます。

【日本バプテスト連盟 諸教会の祈祷会平均出席者数の推移】(2006-2016)



祈祷会の出席者数については、全体的に減少傾向にあるものの、必ずしも会員数や礼拝出席者数とは連動していないことが特徴的です。



【協力伝道会議予定表】

連合名	開催名称（会場）	開催日時
南九州連合	信徒フェスティバル（火の国ハイツ）	2018.7.23-24
北海道連合	信徒大会（日高青少年自然の家）	2018.8.12-14
神奈川連合	連合の集い（マホロバマインズ三浦）	2018.9.23-24
北関東連合	連合50周年記念大会（ニューサンピア栃木）	2018.10.7-8
北九州連合	連合まつり	2018.10.8
東京連合	プレイデイ（関東プレインズ教会）	2018.11.23 2019.2.16
関西連合	協力伝道会議（しあわせの村）	2018.11.23-24
西九州連合	バプテスト大会（ホテル登園・佐賀教会）	2018.11.23-24
中四国連合	全体修養会	2018.11.23-24
東北連合	宣教フェスタ（かんぼの宿 一関）	2018.11.23-24
西関東連合	ファミリーキャンプ	2019.1.13-14
福岡連合	《未定》	2019.2.23
中部連合	《未定》	2019.4.29

※ それぞれの連合で、工夫された企画が進められています。

※ 開催の内容や詳細については、各連合からの案内をご確認ください。

※ 各個教会から複数名の参加を期待しています。

※ 遠方からの参加者に対しては、交通費補助もありますから、それぞれの連合にご確認ください。

【第二版にあたって】

第一版として諸教会・伝道所に送付した「事前配付資料」に、いくつか誤りがありました。お詫びすると共に、第二版では以下のように訂正及び内容の更新をしております。第一版とは、以下の部分が異なりますことをご了承下さい。

頁	行	誤	正
	目次	資料② 教勢の推移 ————— 20	資料② 教勢の推移 ————— 22
3	12	1947年から1978年（連盟自給化）までのSBCからの補助金合計は、 <u>45億2千万円</u> （当時）です	1947年から1976年（連盟自給化）までのSBCからの補助金合計は、 <u>37億5千万円</u> （当時）です
5	12	現・ <u>日韓連帯</u> 特別委員会	現／ <u>日韓・在日連帯</u> 特別委員会
9	グラフ	日本バプテスト連盟 <u>連盟別</u> 教会員数	日本バプテスト連盟 <u>年齢別</u> 教会員数
9	グラフ	〈各年代の表記〉 ※世代を、1歳以上でカウントしています	上から順に 80～、70～79、60～69、50～59、40～49、30～39、20～29、10～19、～9 ※世代を、0歳以上でカウントしています
14	15	初期バプテストが英国国教会から離れたとき、自分たちのグループの中にいわゆる「 <u>教職者</u> 」はいませんでした。 <u>メンバーたちが説教を担い、礼拝・集会を営みました。そしてそのような中から、説教や牧会に専念する専従者としての牧師を立てあげていったというのがバプテストの歴史です。と同時に、当時とかく「異端視」されたバプテストグループは、迫害的な社会風潮の中で、自らの信仰を証しし、互いに支え合うために早い時期から連合（アソシエーション）を形成していったということもまたバプテストの歴史です。</u>	初期バプテストが英国国教会から離れたとき、自分たちのグループの中にいわゆる「 <u>教職者</u> 」はいませんでした。 <u>メンバーの中から、説教や牧会に専念する専従者としての牧師を立て、礼拝・集会を営んでいきました。と同時に、当時とかく「異端視」されたバプテストグループは、迫害的な社会風潮の中で、自らの信仰を証しし、互いに支え合うために早い時期から連合（アソシエーション）を形成していきました。</u>
20	19	<u>正規・非正規</u>	<u>常勤・非常勤</u>

※P.21経常的献金及び、P.24協力伝道会議予定をそれぞれ最新版にしています

協力伝道会議 事前配付資料(第二版)

発行者 日本バプテスト連盟 宣教部
初版 2018.6.2 第二版 2018.8.15

